災害支援の会・活動報告書

四日市看護医療大学

活動のきっかけと目的

きっかけ

初めは、東日本大震災の支援のために他大学が主催していたボランティア活動に有志の学生・教員が参加するという形で 2012 年の 3 月から活動が始まった。

東日本大震災後、時間が進むにつれて被災地のニーズが物質的な支援から心理的な支援に移り変わる中、被災者の方々の心のケアやコミュニティづくりのために、看護の知識・技術を活かすことを計画し、団体としての継続的な支援を行うために 2013 年 4 月「災害支援の会」が結成された。

目的

1） 東日本大震災・そのほかの自然災害を受けた地域への支援活動

2） 東日本大震災について学び、その教訓を防災や災害時に活かす

活動を行っていく中で災害時、看護学生としてのあり方・すべきことを考えること、大きな地震が起きたとき率先して行動できる知識・技術を身に付けることを目的の一つにしている。そして、大学を卒業した後もその経験を活かして行動できる看護師になることを目指して活動している。

メンバー構成

四日市看護医療大学の 31 名の学生と 6 名の教員から構成されている。

この他にも、四日市大学や暁中学校・高等学校の学生、教員と共同で活動を行っている。

地域との連携

1） 宮城県東松島市でのボランティア活動の企画・実施は、現地の自治体と連携しながら行っている。

2） 仮設住宅地での交流イベントでは、四日市市の和菓子屋から銘菓を提供していただき、茶話会に使用している。また、流しそうめんのイベントでも、四日市の製麺所からそうめんを提供していただいた。

3） 東日本大震災の被災地の視察では、NPO 団体の語り部の方々から震災当時や現在の状況についてのお話を聴かせていただいている。

これまでの活動・現在（今年度）の活動内容とその成果

これまでの主な活動内容

東日本大震災被災地へのボランティア活動

宮城県東松島市の仮設住宅地を訪問し、足浴や血圧測定、茶話会などのイベントを行っている。宮城県東松島市の矢本運動公園仮設住宅地を拠点とし、この仮設住宅集会所で私たちは活動初期から現在まで継続的に活動を行っている。

仮設住宅地では、お互いのことを知らない人同士で集まることがほとんどであり、災害によって心身ともに傷を負っている人も多い。その結果、仮設住宅地ではコミュニティが希薄な状態に陥りやすく、『閉じこもり』や『寝たきり』、高齢者では『孤独死』などの問題が発生する。そのため、仮設住宅地では新たなコミュニティ形成の必要がある。そこで私たちは、コミュニティ形成を援助するために交流イベント活動を行っている。私たち看護学生ができる活動として、足浴や血圧測定を取り入れることで、現地の方々の身体的な健康づくりに貢献することもねらいとしている。

また、交流イベントでは、現地の方々とメンバーの交流の機会にもなる。現地の方々との会話の中で災害当時の話を聴かせていただくことで、私たちの災害への学びにもプラスの効果がもたらされる。

東日本大震災被災地の視察

被災地を視察して、災害の痕跡や、復興に向かう町の様子を直接目で見たり、現地の方々から災害当時の様子を聞かせていただいている。

東北×東海　災害勉強会

東日本大震災を体験した看護師や学生から当時の活動について話を聴かせていただき、一緒に交流会やディスカッションを行った。

交流会では、実際に被災して感じた気持ちや状況など、メディアでは分からなかったことを知ることができた。また、東北の学生たちと議論したことにより、自分たちにはなかった意見を聞くことができた。視野が広がり、今後の課題が以前より見えてきたと感じた。

台風被害のあった場所への泥かきボランティア

台風 18 号の被害を受けた京都府亀岡市への災害ボランティア活動（2013 年 9 月 22 日）として、台風によって浸水した家屋の泥かきボランティアを行なった。

フィリピンを襲った台風 30 号の被害地への募金活動

2013 年 11 月に起こったフィリピン台風の被害地のために 12 月 13・16 日の二日間、近鉄四日市駅前ふれあいモールにおいて、募金活動を行った。その結果、市民から総額 50,378 円の協力が得られた。その募金は、「2013 年フィリピン台風救援金」として日本赤十字社に送金した。

今年度の主な活動

5 月	仮設住宅交流ボランティア（足浴・茶話会・血圧測定）	被災地視察（津波被害跡地）
8 月	防災士資格の取得（第一回防災士養成講座）	
9 月	仮設住宅交流ボランティア（流しそうめん）	被災地視察（津波被害跡地・原発被災地）
12 月	仮設住宅交流ボランティア（足浴・茶話会）	被災地視察（津波被害跡地・原発被災地）

仮設住宅交流ボランティアについて

私たちは、活動開始当時から今年度 12 月の訪問まで、3 年間で計 15 回東松島市の仮設住宅地を中心に交流イベントを行ってきた。交流イベントの参加者の方の中には、今まで何度も参加されているという方が大勢いらっしゃり、

「また来てくれてありがとう」と声をかけていただいている。また、初めて参加される方では、以前から参加されている方からのお誘いを受けて足を運ばれたという方もみえる。

平成 26 年度には、矢本運動公園仮設住宅地への訪問を計 3 回行った。活動の内容は、足浴や血圧測定、茶話会、流しそうめんといった交流イベントである。

足浴を行う場ではサークルメンバーたちが手、足、肩のマッサージを行いながら、楽しく会話をさせていただいた。茶話会ではサークルのメンバーたちも同じ机を囲み、さまざまな会話で盛り上がった。夏に行われた流しそうめんの交流イベントでは、子どもたちがサークルメンバーと一緒にめんつゆの配布を手伝うという場面もあり、あたたかな雰囲気の中で、住民同士やサークルメンバーが交流を深めることができた。

こういった活動を通じて、私たちの行っている交流イベントは仮設住宅地の方々の楽しみになり、現地における交流の機会作りに貢献できていると感じた。

↑足浴

↑茶話会

↑流しそうめん

被災地視察について

今年度では津波被害を受けた宮城県の石巻市や、原発被害を受けた福島県の葛尾村などを視察した。

津波被害についての視察

宮城県石巻市の大川小学校や、福島県南三陸町の防災庁舎跡などを視察した。

津波によって倒された 4 階建て鉄骨造りの建物や、町のほぼ全ての建物が流されてしまった土地を見て、津波のおそろしさを感じた。

被災当時のまま保存された建物や、慰霊碑、復興がまだ進まない地域なども見てまわり、年月が経っても東日本大震災のことは風化させてはならないとも感じた。

また、語り部や現地の方々からお話を聞かせていただいた中で、油断せずに素早く避難するということや、日頃からの備えや対策が大切であると学んだ。

↑南三陸町　志津川を望む高台にて

原発被害についての視察

福島県の葛尾村や、南相馬町の小高地区を視察した。

地震や津波の被害が大きくなくとも、放射性物質の飛来によって避難を余儀なくされた土地があり、震災後時間が経った現在でも故郷に戻って暮らすことができない方や、立ち入ることすら許可されない方がいるということを改めて認識した。

また、葛尾村の副村長から震災当時からの避難や復興への計画についてお話していただき、避難先から故郷に帰りたいと思う方と、そうでない方が半分ほどであるということもわかり、原発被災者の方が心に複雑な問題を抱えているということを知った。

↑葛尾村　行き場のない放射性物質

第一回・防災士養成講座

防災士とは、“社会の様々な場で減災と社会の防災力向上のための活動が期待され、かつ、そのために十分な意識・知識・技能を有するものとして、NPO 法人日本防災士機構が認定した人たちのこと”である。

当サークルは四日市東日本大震災支援の会が主体となって開催した「第一回目防災士養成講座」に参加した。

当サークルの 2 年生と四日市東日本大震災支援の会の学生たちが共同で防災士教本を元に分担して資料を作成し、講習を行う勉強会を事前に開いた。また、講習期間に東北の高校生・教員や、サークルの活動で連携している行政・社協・四日市市の消防団・自衛隊といった多くの方々を四日市大学に招いて合宿が開かれた。多くのゲストスピーカーの方々による講演が行われ、私たちは災害の知識と防災士の役割を学んだ。

合宿は大学に三日間宿泊して行われ、災害時を想定した避難所運営シミュレーションや、アルファ米の炊飯、消防車のホースを使った放水、応急処置やＡＥＤ使用の演習といった体験を行った。それらの体験を通して、災害時に必要な技術を身に付けた。

当サークルの参加者全員が防災士試験に合格した。

今後の課題と活動内容

＜ボランティア活動について＞

✸ 今後の課題

1）東日本大震災被災地での活動

被災地のボランティアへのニーズは、時間がたつにつれ変化していくことが予想される。私たちは、求められるニーズは何かを考え、その時々のニーズに合わせた活動を行っていく必要があると感じた。

2）そのほかの自然災害

安全にボランティア活動を行うために、知識や技術を学ぶ必要がある。

✸ 今後の活動内容

1）東日本大震災被災地での活動

震災から時間が経ち、仮設住宅からの移転が進んでいる。その中で、移転の目処が立っていない人が孤立してしまうといった問題がある。私たちは、仮設住宅に住む人が全員移転するまで活動を続けていきたいと考えている。

2）そのほかの自然災害の被災について

台風などの被害があった場合、被災地へのボランティアを行うことを予定している。また、それぞれの災害についての勉強会を行い、得た知識や技術をボランティアに活かすことを考えている。

＜地域防災について＞

✸ 今後の課題

三十年以内に日本で最も起こる可能性の高い大型地震は南海トラフ地震といわれている。南海トラフ地震とは南海トラフ沿いの広い震源域で連動して起こると警戒されている巨大地震である。地震が 30 年以内に発生する確率が 70%前後ととても高く、被害額が国内総生産の約 4 割、死傷者は最大 32 万 3 千人と予想されている。

地震被害は太平洋側に集中しており、三重県も沿岸部を中心に甚大な被害があると想定されている。そのため、普段からの防災対策が必要である。

私たちはこれまでの活動を通じて、地震や津波などから身を守るには普段からの心構えや準備が大切であると学んだ。そして、これまでの活動で得た知識や教訓を私たちが住む地域に活かしたいと考えた。

上記で述べたように、南海トラフ地震では大規模な被害が予想されている。東日本大震災と同じ轍を踏まないために、防災・減災の意識が高まるよう地域に働きかける必要があると感じた。

そのための私たちの現在の課題は、私たち自身がまず防災についての知識を整理して正しく理解すること、そして学んだことを積極的に発信していくことである。

✸ 今後の活動内容

今後の方針として、これまで東北でのボランティア活動と視察を行ってきた経験を活かした活動を予定している。具体的には独自のハザードマップの作成、防災・減災に関する勉強会、長期休暇を利用した防災訓練や勉強会を行う合宿を予定している。

１）　独自のハザードマップの作成

実際に四日市看護医療大学の学生たちが良く利用する近鉄富田駅から大学までの経路を自分たちで歩き、三重県の防災対策部が公表している「防災みえ」で掲載している内容をベースにしたハザードマップを作成する。具体的には町中にある危険箇所の洗い出し、水害での浸水域、各種避難所・避難場所の把握に努め、災害時にできる限り危険の少ない避難経路を選択するための一助とする。多様な災害に対応できるように様々な被災パターンを考慮したシミュレーションを行う。

２）　勉強会

東日本大震災で被災された方からお聞きした言葉から、必要な時に行政の手が間に合わない事のほうが多いことを学んだ。その言葉を活かして行政からの指示がなくても避難生活が出来るように避難所運営の仕方や衛生管理の方法を学ぶ。その他にも避難生活が長期に及ぶことを想定し、看護学生として長期避難生活に役立つであろう技術を習得していきたいと考えている。内容としては厚生労働省が発表している「臨地実習において看護学生が行う基本的な看護技術の水準」に沿い学年別の習熟度に合わせた技術の習得を目指す。

３）　長期休暇を利用した合宿

実際に防災用品を活用し、使用方法や注意点を学ぶ。それと同時に、サークルメンバーの各家庭で準備している防災用品の使用期限、賞味期限の点検、補充を同時に行う。また、合宿内で防災士の資格修得、復習にも力を入れていきたいと考えている。

４）　まとめた情報の発信

まずは私たちにとって身近な生活の場である四日市看護医療大学へと情報を発信していく。

これまでに収集した情報を整理し、それを基に壁紙新聞を作成し、それを学内の掲示スペースへ展示する。それによって四日市看護医療大学の学生に、現在三重県で行っている防災、減災の現状を知ってもらう。その他に学内の防災訓練でも災害についての啓発活動を行っていきたいと考えている。